



近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」が所蔵する山中正吉家にゆかりの品々には、新旧様々なものがありますが、中には今では見ること自体珍しくなった機械が含まれます。今回はその一例として電話機と蓄音機を紹介します。

デルビル磁石式乙号電話機

まず紹介するのは、デルビル磁石式卓上電話機です。デルビルとは、送話機の形式名で、高感度の送話機として、明治29（1896）

年から使用されました。その送話機を組み込み、日本初の卓上形電話機として明治30（1897）年12月に登場したのが、デルビル磁石式卓上電話機でした。この電話機は、当時、電話機の実用性を高めると同時に、調度品としてのデザイン性にも配慮した画期的なものと言われました。当機は、甲乙2種類発売されたうちの乙号で、送話器がスタンドマイクのように筐体の上にとび出しているのが特徴です。また、裏面に張られたプレートから、明治45・大正元年（1912）年に設立された「東京沖電気株式会社製」であることがわかります。

さて、当時の電話は現在のよう

に自動で相手につながるものではなく、まず交換手を呼び出し、相手方の電話番号を伝えてつなげてもらう必要がありました。その為、電話機には交換手を呼び出すために、磁石による手回し式の、発電と同時に呼出信号の発生をする装置を取り付けてありました。余談になりますが、映画やドラマで手廻して呼び出すシーンをご覧になったりして、ご存知の方も多いと思います。実は通話を終了し受話器を置いた後に、交換手へ終了を知らせるために、2、3回ハンドルを回す必要がありますが、その演技は省略される場合がほとんどです。

なお、当機は本体だけでなく、付属するレシーバーや木製のローゼット（接続装置）も残っており、現在、主屋の電話室でご覧いただくことが出来ます。

ポータブル蓄音機
「Grafonola G-208」



次に紹介するのは、ポータブル蓄音機です。蓄音機とは音声再生機（いわゆるレコードプレーヤー）で、ゼンマイ式のレコード盤を回転させて録音した音声を再生する装置のことです。当機は、コロンビア社製のもので、G-208はシリーズの普及機にあたり、1930〜40年代に製造されました。筐体は木製で、化粧紙仕上げとなっており、収納時の大きさは幅約30センチメートル×奥行約38センチメートル×高さ約17センチメートルですが、重さは約7キログラムと見た目よりもかなり重さがあります。

いずれの機械も、昭和の前半を代表する機種であり、これらを購入した山中家の感性がうかがえる品々であると同時に、これまで大切に保管してあったことで、貴重な歴史資料としてみなさんにご覧いただくことも出来ます。



歴史は未来の羅針盤

近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」は、10月18日まで入館料を無料としています。開館時間は午前9時から午後4時まで、休館日は毎週月・火曜日、休日の翌日、年末年始等になります。ぜひともご来館下さい。『近江日野の歴史』全九巻は「旧山中正吉邸」教育委員会事務局や各公民館にて一冊四、〇〇〇円为好評発売中です。ぜひお買い求めください。